

# 偕行現代考

## グローバルホーク

編纂委員会

米海軍空母カール・ビンソンやミサイル巡洋艦が日本海に展開し、日米共同訓練や米韓合同演習が行われ、北朝鮮に対する圧力を高める中で、米空軍の無人偵察機グローバルホーク（RQ-4）が米軍横田基地に初めて配備された。緊張する朝鮮半島情勢の下、改めてグローバルホークの能力を確認するとともに、今回の横田基地配備の意義を考える。

### ●グローバルホークの能力

グローバルホークは、ライアン・エアロノティカル社によって開発された無人航空機で、現在は同社を買収したノースロップ・グラマン社の製品になっている。アメリカ空軍などによって使用されており、イラク戦争で実践に投入されている。

ただ、プレデター（MQ-1）などの無人航空機とは異なり、攻撃能力を持たない純粋な偵察機である。

最大高度は、6万フィート（約1万8000m）で、最大滞空時間は約34時間である。

機体は、全長の3倍近い全幅とアスペクト比の極めて大きなテーパー翼を持った、グライダーのような外形をしている。胴体後部にターボファンエンジン単発を装備し、機首上部の盛り上がった部分には衛星通信のアンテナが収められている。翼は、軽量化を図るため炭素繊維複合材でできている。

無人機のため、緊急時の乗員脱出の射出装置の必要がなく、上部にエンジンの吸気孔を設置することができ、下部を地上探査のために有効に活用することが可能となっている。

機内に合成開口レーダー（SAR）、電子光学・赤外線（EO/IR）センサーを搭載し、各センサーは広域に亘っての搜索・監視活動が可能で、高解像度のスポット・モードも使用できる。

SARの解像度は、ストリップ・モードで1m、スポット・モードでは30・5cmである。地上移動目標識別モードでは、20〜200kmの範囲内で最低4ノットの速度で飛行し、移動目標の識別を行う能力を有している。

EO/IRセンサーは、1mの分解能で約10万平方kmに亘っての搜索・監視活動が可能で、30cmの分解能で最大1900のスポット画像を取得する能力を備えている。目標の探知精度は、半数必中界（CEP）が20mである。機体のブロック30型は、航空機搭載

信号情報収集（ASIP）機材の搭載

により画像偵察に加えて傍受による情報活動（SIGINT）任務に使用することも可能になる。最新型のプロック40型は、マルチプラットフォーム・レーダー技術挿入計画（MP・RTIP）レーダーを搭載した地上監視・指揮用のモデルとなっている。

### ●グローバルホークの運用状況

アメリカ空軍で使用され、運用機数は45機の計画である。2011年3月11日に発生した福島第一原子力発電所事故の際には、被害状況の把握のため、施設上空を短時間飛行した。

2013年3月中旬に、米国政府より北朝鮮への警戒監視強化にともない、米軍三沢基地（青森県）に暫定配備すると、日本政府へ通達。2014年5月、グアムのアンダーセン空軍基地より、青森県の三沢基地へ2機が暫定配備された。

今回、約半年間の予定で、グアムのアンダーセン空軍基地所属のグローバルホーク5機を横田に配備することにした。配備に合わせて整備士ら約110人も派遣されている。

グローバルホークの主な任務は、北朝鮮や中国の軍事情勢の偵察であるが、今回は、北朝鮮のミサイル発射監視のみに使用され、日本海側のみを飛

行するものと思われる。

### ●横田基地配備の意義

今回、グローバルホークが横田基地に配備された表向きの理由は、台風シーズン控えてグアムのアンダーセン空軍基地所属のグローバルホークを日本にある米軍基地に配備するためである。通常なら配備を予定した三沢基地の滑走路が工事中のため、代替え基地が必要となった。

複数の在日米軍基地がある中、横田基地が選定されたのは、グローバルホークの運用上、長い滑走路が不可欠であり、三沢基地と同じ3000m級滑走路があることと、横田基地には戦闘機の配備がなく比較的余裕があることである。

それでも近傍に羽田国際空港があり、混雑する首都圏上空の飛行は困難が伴う。グローバルホークは、一定高度以上は、米国本土の空軍基地から衛星通信で操縦するが、離陸・着陸は横田基地のパイロットが無線で操縦する。

この際、無人機は、真つすぐ離着陸するのではなく、通常スバイラル（らせん状）に機体を上昇、降下させるため、近傍の他の飛行機の飛行状況をかぎり制約することになる。

そのため今回は、日米双方の安全確

保のために事前に様々な取り決めを交わし、国交省は4月下旬に民間事業者に対し、空中衝突を防ぐための注意情報を出している。

ここまで横田基地配備にこだわった意義は何か。

まず注目すべきは、今回の配備が米国による北朝鮮への軍事的圧力強化の局面と重なっていることである。ちなみに2014年から始まった三沢配備は、昨年行われていない。北朝鮮のミサイル発射技術が高度化する中、アメリカが北朝鮮の軍事情報をより必要としたことに他ならない。

うがった見方をすれば、北との対話を主張し、THAADの配備の見直しを主張する文在寅韓国大統領へのメッセージを含んでいるのかもしれない。

二つ目の意義は、単純に能力の向上である。グアムと横田基地の往復には、約8時間かかる。この時間が、丸々偵察に使用出来る。北朝鮮まで横田基地から約2時間、中朝国境まで3時間で到達できる。運用は想像でしかないが、おそらく38度線や海岸線と平行に飛行しながら横目で監視する。横田基地からだど、4機あれば連続的に長期間監視可能である。

横田基地への前方展開は、朝鮮半島を巡る米軍の情報収集・警戒監視・偵察（ISR）活動のさらなる強化につ

ながることは間違いない。

もう一つは、日米の情報共有の問題である。防衛省は、2019年度末から30型のグローバルホーク3機を画像情報収集に特化させて、順次航空自衛隊に配備する予定である。

もし、自衛隊がグローバルホークを横田基地でも使用できるようにになれば、運用の融通性は格段に向上する。

横田基地には在日米軍司令部があり、2012年から自衛隊の航空総隊司令部が移駐して、日米の統合調整所が運用されている。これは、日米の連携の要であり、有事の際には自衛隊と米軍が共同対処する際の基盤になる。

2015年に改定された「日米防衛協力のための指針（ガイドライン）」で日本の平和及び安全の切れ目のない確保のため、ISR活動を強化する方針を打ち出している。この意味でも、グローバルホークを含めた日米両国の情報共有の拡大は、抑止力の向上や他国に対する情報の優越を確保する上で重要である。

自衛隊がグローバルホークを持つことで、結果的に米国の情報収集能力を高めることになる。このことは安全保障の面において米国の協力を取り付ける上で有効なカードとなり、日米安保体制の強化に役立つものである。

（文責 井上廣司）